

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化**①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実****●東京外国語大学 総合国際学研究科国際協力専攻****「臨地教育実践による高度な国際協力人材養成」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

国連機関をはじめ、経済協力開発機構（OECD）、国際移住機関（IOM）等の国際機関と覚書を交わし、学生を長期インターンシップに派遣して、将来的に国際公務員として働くための実践経験を積ませた。また、修士論文、博士論文執筆のため、学生に世界各地でフィールドワークを行なわせ、理論と実践の融合を図った。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

インターンシップ、フィールドワークの事前準備を充実させるための新規科目「臨地実践演習Ⅰ」を開講した。また同じく新規科目「臨地実践演習Ⅱ」を導入して、帰国後の報告、省察、総括の場とし、現地での実践経験で得られた知見やスキル等をより確実に身につけさせるように工夫した。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

インターンシップ、フィールドワークは、いずれも質の高い学位論文として結実した。国際公務員として採用されるためにはきわめて高度な資質・能力、経験が要求されるため、インターンシップを実施した学生たちは、課程修了後も、定期的な勉強会を開催し、あわせて情報の交換も行なっている。

●静岡大学 人文社会科学研究科臨床人間科学専攻**「対人援助職の倫理的・法的対応力の育成」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

- ・学内外の実習科目を増設し、実習施設も新規開拓し、対人援助の現場で学ぶ実践的教育を充実させた。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

- ・連携施設を8施設増やし、分野も広げ、多様な学習活動に対応できるようにし、5日間（40時間）の短期集中型の実習を実施した。
- ・共通課題および個人課題を設定し、毎日の実習日誌作成および施設担当者からの指導・フィードバックを受けることにした。
- ・実習を担当する専攻教員の役割も明確にし、実習前、実習中（連携施設での最終カンファレンス出席）、実習後の各指導ステージにおける教育的関わりを徹底した。

- ・学外実習における体験を共有するため、大学院生・教員、連携施設担当者を構成メンバーとする全体報告会を毎年開催し、連携施設より本事業継続への貴重な助言を得るとともに、継続的な協力を維持できるよう努めた。
- ・実習授業のほかに、専門職などを対象としたさまざまな研修会等への参加を学生に促し、経費面からも支援した。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

- ・学生による実習報告書には、対人援助の現場を体験したことにより、現場の状況、ならびにチームケアのなかで自身の専門性の発揮の仕方などについて理解が深まり、職業意識を深める上でも有意義であったとの感想が多く、現場実習の効果が確認できた。
- ・連携施設との報告会の開催などによって、地域の対人援助の課題について緊密な連携を深めていくことを確認できた。

●京都大学 地球環境学舎

「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」の事例 <人社系>

具体的に何を実施したのか

本プロジェクトにおいては、修士課程学生全員が長期インターン研修を必修科目として実施し、長期インターンシップやフィールドワークに従事している。特に、従来の委託型・応募認可型のインターンシップではなく、受入機関と指導教員、学生がプロジェクトを立案、実行するプロジェクト型のインターンシップ、もしくはフィールドワークを実施した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

実施にあたっては、必修科目として実施していることから、厳格な合否判定を実施すること、特に海外フィールドワーク中における安全管理、プログラムの内容が単なる就労体験ではなく、大学院や本教育プログラムの教育目標に準拠していることの確認を徹底することが重要であり、一括で管理を行う運営担当委員会を設けた。また、学生の保険加入や一部地域に渡航する際に必要となる予防接種等の安全教育、基礎科目におけるフィールドワーク体験など、事前準備も十分に行った。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

修了生を対象としたアンケートにおいても、様々な分野の学生と交流を図りながらのプロジェクト型の長期インターンシップやフィールドワークの実施できたことに対する満足度が高いという結果が出ている。また、ミニプロジェクトワークにおけるコースワークにおいても、多様なインターンシップ実施機関で得られた成果がフィードバックされており、様々な分野・立場からの情報、知見を共有・理解する機会を学生に与えている。

● 國學院大学 文学研究科史学専攻**「高度博物館学教育プログラム」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

国外を含む学内外の機関および関連企業等と大学院生のインターンシップ受け入れを主とする教育研究活動の共同事業実施に関する合意覚書を取り交わし、大学院生の実際の業務体験機会を数多く提供した。また、大学院生各自の研究遂行能力向上を目的に、国内外の機関における調査実施に係る旅費の補助を実施した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

大学院生のインターンシップ実施にあたっては、その教育効果を確実にするため、従事期間中の業務内容や反省点などを記録する日誌の記載を義務付け、受入れ側担当職員と担当教員がその内容を確認し、具体的な指導に活用した。また、選定にあたっては、提出された応募者の研究計画書をプログラムの取組実施担当者会議において厳正に審査して公正に決定した。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

国内外におけるインターンシップおよび大学院生の研究遂行能力向上を目的とする研究費補助により、それらの参加大学院生の研究成果発信意欲を大いに高めることができ、実際にインターンシップ参加者・研究費補助受給者の多くは、それらの成果を学会発表や論文執筆につなげることができた。また、関連業種への就職に際しても有効に作用した。

● 関西学院大学 文学研究科総合心理学専攻**「国際化社会に貢献する心理学実践家の養成」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

大学院教育における「科学者—実践家モデル」に基づき、従来の基礎重視の姿勢に加えて実習現場でのスーパービジョンを強化し、産業・教育・医療現場における「実習」を通して高度な実践力とコンサルテーションスキルを習得させた。「人と物」の分野では企業からの受託研究への参加や外部研究機関での共同研究の実施、「人と人」の分野では地方自治体との連携による教育現場・臨床現場での実習体験等を通して心理学実践家として必要な思考法と技術を習得させ、心理学による社会貢献の方法と内容を具体化させた。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

「人と物」の分野では企業の企画・研究開発部門におけるプロデューサーやプロジェクトリーダーとして使いやすい機器や快適な環境など人の心に関わる製品やシ

システムの開発研究者を育成すること、また、「人と人」の分野では学校園臨床や医療の現場におけるリーダーとして問題の適切なアセスメントからエビデンスベーストの介入およびコンサルテーションを提供できる人材の育成を目指した。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

従来の大学・研究所だけでなく、企業の研究開発部門等や学校園・病院臨床現場に多くの心理学実践家を輩出してきた。これらの事実は「科学者－実践家モデル」に基づく我々の取り組みが高度な専門的職業人養成に有用であることを示しており、大学院教育の改善・充実させるためのモデルとなりうることを示している。

●立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋研究科国際協力政策専攻 「アジア太平洋の環境保全開発リーダー育成」の事例 <人社系>

具体的に何を実施したのか

国内・海外を含め、フィールドスタディ（現地調査）を3年間で6回実施した。フィリピン・パラワン州、大分県、三重県、沖縄県（2回）、長崎県へ赴き、マングローブ林・地下河川・ゴム木の植林地・ごみ埋め立て地の視察、簡易水質検査・汚濁質測定・電気化学的方法による水質測定法に関する実験、環境配慮型工場や生物保護センター訪問、現地大学研究所における意見交換・ワークショップ開催等を行った。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

フィールドスタディは、いずれも本プログラムのコーディネータあるいは担当教員の学外ネットワークを活用したことにより、研修内容や研修行程、調査・観察地の選定を事前に専門的立場の研究員からアドバイスを受けながら計画を立て、本プログラムにおけるフィールド・スタディの目的に照らして詳細を組むことができた。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

- ・短期間ではあっても、参加したプログラム学生個々の研究分野を網羅したのもとなり、本プログラム最終報告会において、学生より「フィールドスタディの体験を通して、環境についての理解を深めることが出来た」との意見が多数得られたことから鑑みても、プログラム学生の環境問題に対する体験的理解を促すと同時に、将来につながる深い見解を得るのに非常に有効であったと言える。中には、フィールドスタディで学習したことをテーマに修士論文を執筆をした学生もおり、その後、博士後期課程にて同研究を進めている。
- ・フィールド先で受入れをした研究機関の専門家とのネットワークを学生が得ることが出来た点でも大きな効果があった。

**●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施したのか**

台湾、タイ、ベトナムなどのアジア、フランス、マケドニアなどのヨーロッパ、そして京都と西日本各地の国内と、まさに国内外で行われている建築や都市、集落の保存や再生事業に参加することをフィールド実習とし、それを教育プログラムの中核とすることで、実践的な知識と技能を身に付けさせることができた。地域だけでなく、町家、町並み、集落、近代建築、景観など事業の対象となるものも広範なものに取り組んだ。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

保存・再生の事業は、その場所の伝統、風土、民族性などにより大きく異なるものとなる。そのために、それぞれの実習の現場では、単に物理的な保存・再生の技術やデザインだけでなく、その場所の歴史や環境についても学ばせ、さらにそこで事業者や研究者の指導もおおいだ。また、できる限り、学生たちが学んだ事項や、保存・生成へのアイデアを現地で発表させ、現地の住民や行政組織と議論する場も設けた。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

地域だけでなく、保存・再生の対象となるものも広範なものに取り組んだことにより、学生は、事業の多面性を理解することとなった。さらに、上記のように、現地の歴史や風土の個別性についても学び、それが保存・再生の方向性を決めることを理解するようになった。そのことは、実習を自由に報告する Web システムや報告書の記載においても、よく表れている。とりわけ、旧植民地や他民族支配の経験がある地域での保存・再生の困難さと可能性について認識したことがわかった。

●大阪大学 基礎工学研究科システム創成専攻**「システム創成プロフェッショナルプログラム」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施したのか**

学生国際セミナーなどへの参加を通して研究者としての自立を促し、国際リーダーとしての資質を高めるため、同時に海外研究者との共同研究の機会を得る手がかりとなるネットワーク作りのために、大学院生の海外研究機関への研修、国際会議での英語発表討論研修へ派遣を積極的に支援した。基礎工学研究科の国際交流委員会と連携して、年1回の日越学生交流セミナーを開催し、ベトナム科学技術アカデミー物質科学研究所の見学や学生主体のセミナー運営などを通して、国際交流教育を実施した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

海外研究機関、国際会議へ専攻内の学生を海外派遣し、英語による科学技術プレゼンテーションの現地研修を行うだけでなく、帰国後に技術英語活用状況を報告させ、その助言を集め学生海外渡航データベースを制作した。学生海外渡航データベースに記された他学生への助言としてのフィードバックにより、渡航前の効率的な事前教育を行うことができた。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

学生の海外研修、国際会議参加研修に対して帰国後ならびに終了後に、必ず報告書を作成させ、個人情報を除き助言集として冊子版と電子版のデータベースを作成し、特に後者は本取組のホームページを介して一般公開した。アンケートで統計を取るまでもなく、すべての助言において、海外研修、国際会議参加研修への参加がポジティブに評価され、他学生、後輩学生へ積極的な海外学術経験への参加を勧める内容が多く見受けられた。